

【分科会7】デイケアにおけるリカバリー

医療法人福智会

福智寿彦・本間貴宣(すずかけクリニック)、金澤秀夫・笹川佑記(福智クリニック)

近年デイケアを取り巻く環境や、社会から期待される役割も大きく変化してきています。

従来の「デイケアはこうあるべきだ」という常識に縛られるのではなく、医療施設としてのデイケアが、メンバーから、家族から、社会から求められていることは何なのかについて「リカバリー」の観点から会場の皆さんにも考えていただきました。会場全体でのディスカッションに先立ち、話題提供として医療法人福智会での取り組みを三演題発表させていただきました。

演題①「デイケアにおけるアウトリーチの取り組み」

デイケアという治療施設にも、限界はあります。登録はしたものの、どうしても安定した来所ができないメンバーは少なくありません。しかし、このような状況に通所施設であるデイケアができることには限界を感じずにはられません。今回、従来の精神科訪問看護をさらに強化し、上記のようなデイケアの限界を補うべく訪問看護部門を新設するにいたるまでの経緯とその目的などについてご説明させていただきました。

演題②「デイケアのリカバリー志向を評価する—Recovery Self Assessment—」

デイケアの良し悪しを判断する基準は何でしょうか？ 卒業が早ければ良いデイケアでしょうか？ 病状がより改善しているデイケアが良いのでしょうか？ しかし、病状の重いメンバーを沢山受け入れて頑張っているデイケアは、先の基準ではその努力の成果はなかなか数値に反映されません。そこで、発想を転換して「患者さんを評価する。」のではなく、「その施設がどれだけ患者のリカバリーを促進できるのか」もしくは「どれだけリカバリーの観点に基づいて支援を行っているのか」といった視点で評価をしてみたいかがでしょうか。

演題③「新しいデイケア」

しかし、依然としてデイケアが社会的役割としての機能が果たせていないのではないかと懸念は払しょくされていません。従来の「デイケアは〇〇あるべき」という常識に固執することなく、本当に患者さんのリカバリーにとって必要な支援とは何なのかを考え直してみたいかがでしょうか？ 決して当院のやり方が全てというつもりはありませんが、新たなデイケアでの支援の在り方として地域を巻き込んだデイケアプログラムの取り組みをご紹介します。

三演題を叩き台として、「精神科デイケアの常識を改めて見直してみよう」というテーマを、本分科会では会場の皆さんに問いかけました。休憩後の会場全体でのディスカッションはとても盛り上がり、「そもそもデイケアは医療施設、治療施設といわれるが何を治療しているのか？」、「地域活動やスティグマの是正などの活動までデイケアが行う必要があるのか？」、「デイケアでメンバーに主体的に取り組んでもらうためにはどのようにしたら良いのか？」、「デイケアを利用している立場のひとりとしてこれからどのように利用していったら良いのか？」など様々な立場から多様な意見交換がなされました。

最終的には、どうすべきという明確な答えは出ておりませんが、自分たちが日常的に関わったり、接している「デイケア」を常識や慣習に縛られることなく、見つめ直していただく良い機会をご提供できたのではないかと考えます。

《福智寿彦(医療法人福智会)》